
ピーテル・サーンレダムの《聖バーフォ教会》をめぐる一考察

——座る母子のイメージと慈善事業の関係を中心に

湯山彩子（東北大学）

ピーテル・ヤンスゾーン・サーンレダム（1597-1665）は、17世紀ネーデルラントを代表する建築画家である。とりわけその教会画がよく知られており、聖なるイメージが徹底的に取り払われ、明るく照らされた教会内部の姿は、ヘンドリック・ファン・ステーンヴェイク（子）（1580頃-1649以前）など、先立つ世代のそれとは一線を画すものといえる。その中で、1636年の作品《ハールレムの聖バーフォ教会の内陣と交差部を横切る眺め、クリスマス・チャペルからブルーワーズ・チャペルおよび南袖廊を望む》（チューリヒ、ビュールレ・コレクション所蔵。以下、チューリヒの《聖バーフォ教会》）には、座る母子の像が前景に大きく描かれている。人物像を小さく、しばしば不鮮明に描くことの多いサーンレダム作品のなかで、この母子は特異に映る。この作品に限らず、チューリヒの《聖バーフォ教会》をはじめ、1630年代中期からサーンレダム作品にはときおり教会内に座る母子の像が描かれるようになり、エマニュエル・デ・ヴィッテ（1617-1692）など、同時代の画家たちもそれに倣った。サーンレダムを取り上げたこれまでの研究は、遠近法や下絵から油彩への写しなど、技術面に特化したものが多い。（Ruurs, 1983, Kemp, 1990, etc.）そのため先行研究においてサーンレダムの描画技法に関しては明らかになってきたが、実際に描かれてきたモチーフに関する考察は、オルガンや墓といった特定のモチーフに関するものが大部分であり、十分な考察がなされていない。それに対し本発表では、これまであまり注目されてこなかった座る母子の姿というモチーフを中心に取り上げる。

サーンレダムを除く数人の画家の作品に描かれた母子に関する考察はこれまでに多少なされており、そのイメージが聖母子のメタファー、教会の擬人化、慈愛の象徴などであるとする説が提示されてきた。先述したように、教会内に座る母子というイメージの先駆はサーンレダムであることが推察される。したがって、彼が描いたこのイメージの役割について考察を進めることは重要である。

今回発表者は、17世紀初頭から行われるようになった教会の慈善事業に注目する。アムステルダムやユトレヒト、ハールレムなどで行われたプロテスタントによる慈善事業は、都市が理想的なそれに近づくための一つの手立てであった。本発表では、教会内に座る母子のイメージを描くことはサーンレダムから始まった慣習であること、このイメージは教会の慈善事業に深く関係していることを明らかにする。そして、こうしたイメージが当時の「オランダ」を表象するものとなっている可能性について検討する。